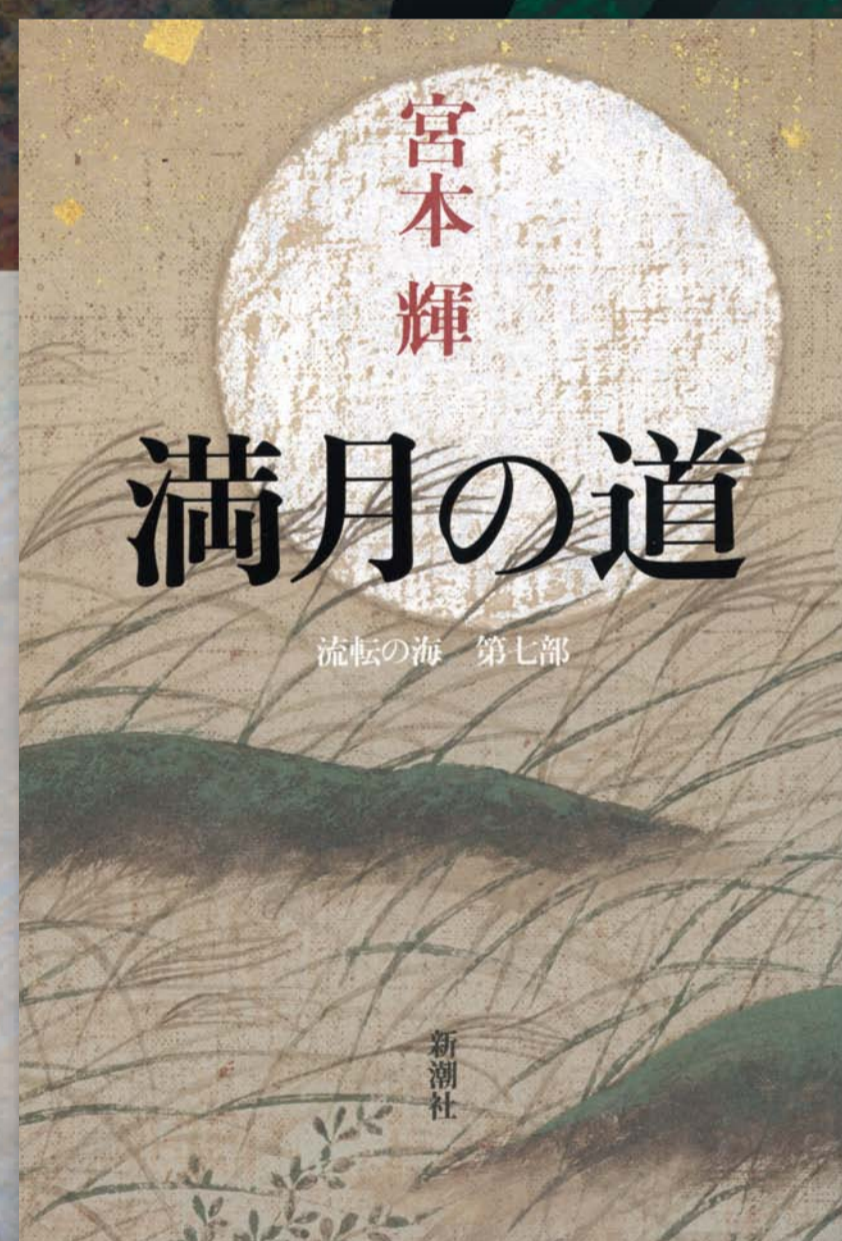


「それでお母ちゃんを殴ったら、
ぼくは許さんぞ」

こいつはもうひとりで生きていける。
俺の役目は終わった。



2014年 新潮社

「Story

3年後に東京オリンピックをひかえ日本中が好景気に包まれているなか、松坂熊吾は引き続き大阪市福島で駐車場管理人と中古車販売店の両方を手掛けている。伸仁は高校生となり絵画鑑賞を趣味とする一方、父・熊吾を押さえつけることができるほどの力もついた。城崎に残された周栄文の娘・麻衣子に女の子が生まれ、麻衣子は手打ち蕎麦屋を営みながらひとりで赤ん坊を育てる決意をする。房江は飲酒癖から逃れることのできないものの、夫・熊吾の事業を支え、麻衣子の面倒も見、自分が苦勞した幼い頃や最初の結婚を振り返る余裕も出てきた。順調に進んでいる中古車業は、頼りにしていた経理担当者の不正、熊吾の過去の愛人の出現など、さまざまな問題が噴出し、危機を迎えていた。

『流転の海』シリーズ

『流転の海』シリーズは、宮本氏のライフワークとなる長編連作である。宮本氏の父、母、そして自分自身をモデルとしているといわれ、物語は主人公の熊吾に関わる個性的な人達を中心に、終戦直後の混乱の中、必死にもがき生きてきた人々の生きざまを描く。舞台は、時代が進むにつれ、故郷の愛媛、新天地を目指して移住した富山、そして再び大阪へと変遷すると同時に、父を中心に描かれる世界から、息子の目を通した物語へと変わってゆく。

『流転の海』(流転の海 第一部) 福武書店1984年7月・新潮社1992年11月
『地の星』(流転の海 第二部) 新潮社1992年11月／『血脈の火』(流転の海 第三部) 新潮社1996年9月
『天の夜曲』(流転の海 第四部) 新潮社2002年6月／『花の回廊』(流転の海 第五部) 新潮社2007年7月
『慈雨の音』(流転の海 第六部) 新潮社2011年8月／『満月の道』(流転の海 第七部) 新潮社2014年4月
『新潮』(新潮社) 2014年6月号～2016年4月号にて、第八部である「長流の畔」が連載。



満月をたのしむ

大阪市内にようやく環状線が誕生するという時代、熊吾はまたしても信頼していた部下の裏切りにあう。一方、麻衣子の住む城崎は、大阪の喧騒とはうって変わって、ゆとりと温泉につかり、月を楽しめることのできる別世界。大阪と城崎を行き来する房江さんの心のなかのつばきやが、「小説」という交響曲の低音部を流れるメロディーのように響いてきた。

Review